【曲目解説】

フィンガルの洞窟は、スコットランド北西沖に浮かぶヘブリディーズ（ヘブリデン）諸島の一つ、スタッファ島にあります。そそり立つ断崖が海の波によって侵食されてできた洞窟です。メンデルスゾーンは、1829年、20歳のときにスコットランドを旅しますが、この曲は、スコットランド交響曲とともにその旅の印象を基に作曲されたものです。曲が完成したのは翌1830年のイタリア旅行中で、1832年に加筆改訂された後に出版されています。一般に演奏されるのはこの改訂版で、原題は演奏会用序曲「ヘブリデン」です。序曲とは言っても、歌劇などの幕開けのための音楽ではなく、それ自体が独立した描写的な標題音楽で、このジャンルの音楽は後に「交響詩」として発展していきます。メンデルスゾーンはこのような序曲を5曲残しています。メンデルスゾーンに批判的だったというワーグナーでさえ、この曲を「一流の風景画のような作品」と絶賛しています。この曲が完成した1830年は、ベルリオーズが幻想交響曲を作曲した年。ベートーヴェン(1827年没)やシューベルト(1828年没)が亡くなった直後でもあります。絶対音楽に替わって標題音楽が台頭していく先駆的な時代と言えるでしょう。曲は、ロ短調・ソナタ形式で、ヴィオラ、チェロとファゴットによる波のうねりを思わせる暗い第1主題に始まります。やがてヴァイオリンとヴィオラが漣のような細かい音で伴奏する中、チェロが優美な第2主題を朗々と歌います。

バッハは、「管弦楽組曲」と呼ばれる作品を、現在残っているもので4曲作曲しています。序曲とそれに続く数曲の舞曲から成るもので、これらの中では、フルート協奏曲のような趣のある「第2番」が最も有名です。また「G線上のアリア」として知られる優美な楽章を持つ「第3番」もしばしば演奏会のプログラムに登場します。他の2曲もこれらに劣らず優れたもので、アンサンブル・ディマンシュでは第59回演奏会で取り上げた「第4番」は、編成も大きく、大変堂々とした名作です。本日演奏する「第1番」は、室内楽的な雰囲気があり、「マタイ受難曲」を頂点とする宗教音楽、「フーガの技法」のような極めて抽象性の高い音楽とは異なる表情の、聞く人とともに音の躍動を楽しもうとする、バッハの別の一面を鮮やかに見せてくれる佳品です。

カリンニコフは、1866年ロシアのオリョーリ（モスクワから南南西360km）の貧しい家庭に生まれました。同世代の作曲家には、ドビュッシー（1862)、R. シュトラウス（1864)、グラズノフ（1865)、シベリウス（1865)、サティ（1866)などがいます。少年時代から楽才を顕し14歳で聖歌隊の指揮者を務めています。モスクワ音楽院に進みますが学費未納で退学。その後モスクワ楽友協会付属学校で作曲を勉強。劇場の楽団で演奏するかたわら写譜家としても働いて生計を立てました。1892年にチャイコフスキー（1840-1893）に認められてマールイ劇場の指揮者に推薦され、さらに別の歌劇団の指揮者も務めますが、以前からの過労がたたって結核に罹患し活動を断念し、温暖な気候のクリミア南部に向かうことになります。1895年には本日演奏する交響曲第1番を完成します。金銭的な援助を仰ぐため、リムスキー・コルサコフ(1844-1908)に楽譜を送りますが、残念なことに妻の写譜ミスが多く評価が低かったと伝えられます。しかし彼の才能を認めた人々の援助も多く、この頃ラフマニノフ(1873-1943)が代わりに楽譜出版社にかけ合い歌曲3曲が売れ、さらに1897年友人によりキエフにて交響曲第1番の初演が行なわれ大成功を収めます。その後モスクワ、ベルリン、ウィーン、パリでも演奏されますが、残念ながら病床中の作曲者はこの曲を実際に聴くことはなかったようです。カリンニコフは交響曲第1番の出版と35歳の誕生日を目前にして、1901年世を去っています。日本では、近衛秀麿の指揮で、1925年、日露交歓交響管弦楽演奏会で初演されています。